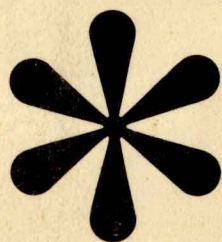
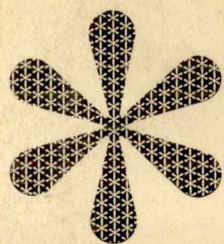
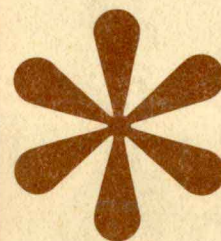
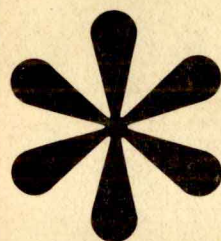
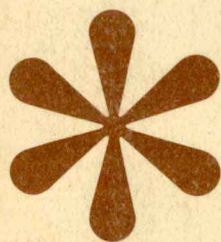
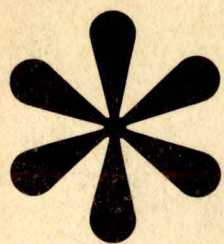


本多勝一

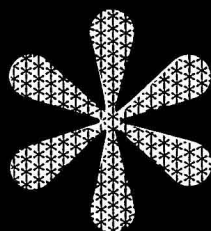


日本語の作文技術

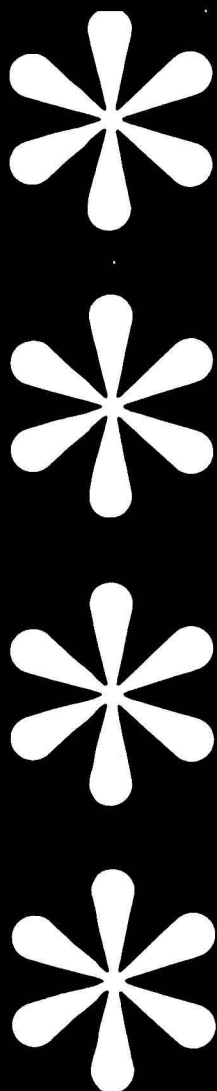




本多勝一



日本語の作文技術



本多 勝一（ほんだ・かついち）

1931年長野県に生まれる。朝日新聞
記者。

〈著書〉『NHK受信料拒否の論理』

（未来社） 『きたぐにの動物たち』

（実業之日本社）

日本語の作文技術

著者 本多勝一

定価 九八〇円

第十一刷
昭和五十一年六月三十日
昭和五十一年十一月十日

発行者 角田秀雄

発行所
東京 名古屋 大阪 北九州
朝日新聞社

印刷所 凸版印刷

はじめに

東京・新宿の「朝日カルチャー・センター」という市民講座で、一種の文章講座を担当する機会が最近ありました。一週一回二時間ずつの二カ月間。一般募集に応じた五〇人ほどの聴講生たちは、学生やジャーナリスト・商店主・主婦など、また年齢的にも二〇歳前後から六〇歳くらいまで、非常に広範囲のかたがたでした。全部で八回だけの講座だし、日本語を書く職業のいわば現場にいる者の一人として文章には一応の関心も持っているのだからと、かんたんに考えて私は始めたものです。想えば、講義に類することは私にとってこれが生まれて初めてでした。

ところが第一回の講義が半分もすまぬうちに、これは大変なことを始めてしまったと思いました。初めての講義ですから、不馴れで、不細工で、不手際なことはいうまでもありません。それは覚悟をしていたことです。大変だと思ったのは、第一に聴講生たちの熱心さに圧倒されたからであり、第二に、その熱意に応ずるだけの密度の高い講義を八回も続けることができるだろうかという不安を感じたからでした。途中からほとんど冷や汗の出る思いでしたが、まさか投げだ

すわけにもゆきません。耳の不自由な聴講生も一人いて、ヴォランティアがそばで手話の通訳をしている姿を見ると、一層あせってしまいます。

こうして第一回の講義は、なんとかゴマ化すようにして終わりました。実は講義の準備など、前日に一時間くらいさいいてメモをとっておけばいい、日ごろ文章について抱いている雑感を話せばいいくらいに考えていたのです。ところが実際にやってみたら、メモにしておいたことは予定より半分以下の短い時間で話してしまった。これではあと三回くらいでもう話すことがなくなってしまうじゃありませんか。

そこで第二回からはメモをやめて、二時間の内容をすべて完全なかたちで原稿に書くことにしました。実行してみると、私自身これはたいへん勉強になります。たとえば作文上のある原則を講義するにしても、メモだけではその原則を示すだけで終るところですが、こうして原稿のかたちに完成しようとすると、その原則がなぜ有効かという背景の分析にまでたちいらざるをえないからです。だから「大変だ」とは思ったものの、べつに後悔はしませんでした。むしろ感謝した。そのかわり準備には「一時間くらい」どころか一回分に二日も三日もかかりました。新聞記者としての現場の仕事がその影響をうけて、いくらか手ぬき工事になったかもしれません。

そのようにしてなんとか八回の講義は終ったけれども、どうも不安は消えません。私の講義は間違っていないかどうか。なにかとんでもない誤りを犯してはいないだろうか。どうせ国語

学や言語学の専門家ではないのだから、専門家の間では常識にすぎないことを私がもったいぶって話したとしても問題とするほどのことではありませんまい。また枝葉末節の部分で誤ることは、どんな天才や偉人でも免れないのだから、しろうとの私が誤っても当然でこそあれ恥じる必要は毛頭ない。しかし日本語の根幹にかかわるような原則について、全くカンちがいをしていたり、正反対の解釈をしていたり心の心配はないだろうか。これは私個人の問題にとどまらず、多くの聴講者に対する責任でもあります。できれば言葉の問題に関心を持つ多くの人々の批判を仰ぎたいと思っています。

以下に展開される作文論は、このようにして一応つとめた講義の草稿にいくぶん手を加えた上、月刊誌『言語』（大修館書店）に一年間連載したものであります。「言葉の問題に関心を持つ」人を主な読者とするこの雑誌で、専門家・素人をとわず多くの人々に目を通していただき、事実何人かの方々から貴重な示唆をうけました。今こうして一冊の単行本にまとめましたものの、もちろんこれは完成品には程遠く、ひとつの試行錯誤の過程であり、一種の作業仮説にすぎません。しかし日本語という私たちの民族文化をより良いものにみがきあげてゆく上で、これは小さいなりに意味のある作業のひとつだとは思っています。さらに多くの人々の批判・教示を得て、近い将来により進んだ改訂版を出せるようにしたいものです。

なお、あらかじめお断りしておかなければならないことが一つあります。この本ではさまざま

な例文が実際の単行本・新聞・雑誌などから実例として拾われていますが、良い例としての場合はともかく、悪い例の場合は筆者個人の名は挙げておりません。しかし私が創作したものではないことを示すために、出所は明らかにしてあります。その結果、少々困ったことが起きました。私は専門の言語学者や文法家ではないのですから、わざわざ悪文をさがすために本を買いはしないし、そんなヒマありません。ということは、その本なり雑誌なりを読みたくて求めたのですから、何らかの意味でそれらは私のために役立ってくれたのだし、著者にしても尊敬すべき人である場合が多いわけです。そうした本や雑誌の文章を読んでいながら、ついでの作業として、あくまで余分なこととして、気付いたときに悪文を拾っておいたのが、ここで狙上に置かれたさまざまな例文であります。これではまるで、尊敬すべき筆者に対して私が恩をアダで返したようなことになってしまっているではありませんか。しかし、それをやりたくないからといって、あらためて悪い例をさがし求めて本をあさる余裕はどうていありません。仕方なく、すべてそれらを利用させてもらいました。すみません。そういう方々には平身低頭、鞠躬如きくきゆうじよとして謝罪の言葉とともに贈呈いたします。実際、知人・友人どころか親友の文章さえ悪い例として出ているのですから（私自身の悪文も分析してあります。それに、文章論・作文論の類を書いている人々にせよ、いわゆる「文豪」たちにせよ、全くスキのない完璧な文章ばかり当人が常に書いた例など、かつてあったためしがないようですから、この種の問題では自分のこともタナに上げない方が宜しいよ

うです。)したがって、そうした悪文の例は決して内容も悪いというわけではありません。むしろ反対のことが多いと考えて下さい。内容とは無関係。単に技術上の話だけです。新聞から拾った悪文にしても、圧倒的に多いのは『朝日新聞』ですが、これはなにも一般紙の中で朝日が最も文章が悪いということでは毛頭ありません。私はいわゆる三大紙としてはふつう朝日しか読まないで、その結果として実例も朝日から拾ったものが多くなったというだけの単なる物理的因果関係であります。

最後にもうひとつ。最近「日本語ブーム」という声が出版界できかれますが、本書はそうしたブームに便乗したわけではもちろんありません。「書く」ことを仕事とする職業についたときから関心を抱いてきた問題について、一昨年(一九七四)秋の市民講座で語ったままでです。とくに「日本語の」作文技術とした理由は、諸言語の中の日本語という意味を現したからであって、内容がそのまま反映した結果といえましょう。

日本語の作文技術・目次

はじめに

第一章 なぜ作文の「技術」か

第二章 修飾する側とされる側

第三章 修飾の順序

第四章 句読点のうちかた

第五章 漢字とカナの心理

第六章 助詞の使い方

1 象は鼻が長い

2 蛙は腹にはヘソがない
—— 題目を表わす係助詞「ハ」

3 来週までに掃除せよ
—— 対照（限定）の係助詞「ハ」

4 少し脱線するが……
—— マデとマデニ

5 サルとイヌとネコとがけんかした
—— 接続助詞の「ガ」

—— 並列の助詞

第七章 段落

第八章 無神経な文章

1 紋切型

2 繰返し

3 自分が笑ってはいけない

4 体言止めの下品さ

5 ルポルタージュの過去形

6 サボリ敬語

第九章 リズムと文体

1 文章のリズム

2 文豪たちの場合

第一〇章 書き出しをどうするか

第二章 具体的なことを

第三章 原稿の長さや密度

第三章 取材の方法

付1 メモから原稿まで

付2 日本語と方言の復権のために

コメント (梅棹忠夫氏)

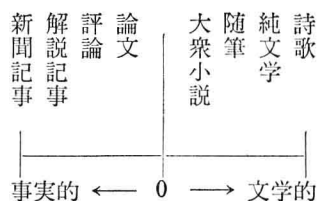
おわりに

装幀・田村義也

小学校四、五年当時の担任・竹内斌先生に捧ぐ

第一章 なぜ作文の「技術」か

ここで作文を考える場合、対象とする文章はあくまで実用的なものであって、文学的なものは扱わないことを前提としたい。とはいっても、両者にははっきりした境界があるわけでは決していない。朝日新聞社の調査研究室が社内用として非公開で出しているタイプ印刷の研究報告シリーズの中に、もう十数年前に出た『文章のわかりやすさの研究』（堀川直義）という一冊があって、このあたりのことが次ページのように図式化されている。「事実的」のかわりに「実用的」とすることもできるし、あるいは右をフィクショナル、左をノンフィクショナルということもできよう。この分類でいえば右翼になる「文学的」な文章のための作文は、ここでは考えない。反対側の「事実的」文章のための作文だけを対象とし、その中には手紙・報告文・広告文・アピール・宣伝文・ルポルタージュなども含めてよいだろう。ただし日記は除外したい。あくまで他人に読まれることを最低条件とした文章だから、日記のように自分だけのものであれば、極論すればどんなわかりにくい文章でもよく、暗号でさえ構わぬことになる。また例文として小説から引用す



ることもあるが、それはあくまで「作文の技術」のためであって、決して「小説の技術」のためではない。言葉の芸術としての文学は、作文技術的センスの世界とは全く次元を異にする（注1）。その意味での「事実的」あるいは「実用的」な文章のための作文技術を考えるにさいして、目的はただひとつ、読む側にとってわかりやすい文章を書くこと、これだけである。

実はこうした文章論に類するものを書くことに、私はいささかの躊躇と羞恥をおぼえざるをえない。というのは、私自身がすぐれた文章を書いているわけではないし、もちろん「名文家」でもないからだ。それに、私のごく身近な周辺、つまり今つとめている新聞社の内部にさえ、私な

ど及びもつかぬ名作家や、技術的にも立派な文章を書く人がたくさんいる。いわゆる年代的な「先輩」ではなしに、純粋に文章そのものから見ての大先輩に当るそうした人々をさしおいて、この種のテーマを書きつづることの慚愧^{ざんき}を、読者も理解していただきたい。にもかかわらず書くのは、開きなおって言うなら、むしろヘタだからこそなのだ。もともとヘタだった。うまくなりたいと思いつづけてきた。中学生のころを考えてみても、同級生に本当にもうまい文章を書く友人がいた。とてもかなわないと思った。はからずも新聞記者となってすでに十数年、もはや「名文」や「うまい文章」を書くことは、ほとんどあきらめた。あれは一種の才能だ。それが自分にはないのだ。しかしこれまで努力してきて、あるていどそれが実現したと思っているのは、文章をわかりやすくすることである。これは才能というよりも技術の問題だ。技術は学習と伝達が可能なものである。飛行機を製造する方法は、おぼえさえすればだれにでもできる。発明したのはたまたまアメリカ人だが、学習すればフランス人でもタンザニア人でもエスキモーでも作れる。同様に「わかりやすい文章」も、技術である以上だれにも学習可能はずだ。そのような「技術」としての作文を、これから論じてみよう。

だれにも学習可能な「技術」としての日本語作文を考えるに際して、よく誤解されている作文論があることを注意しておきたい。

たとえば「話すように書けばよい」という考え方がある。だれだって話しているじゃないか。

たいていの人は頭の中でいったん作文してから口に出すのではない。いきなり話している。それならば書くのだって同じだ。話すように書けば書ける。「作文」ということで緊張し、固くなるから書けないのだ……と。

だが、この考え方は全く誤っている。話すということと作文とは、頭の中で使われる脳ミソの部分で別だというくらいに考えておく方がよい。文章は決して「話すように書く」わけにはいかないのだ。たとえば話すときの状況を考えてみよう。多くの場合、話す相手がいる。その表情・反応を見ながら、こちらも身ぶりなどの補助手段で話をわかりやすくすることができ。したがっていわゆる文法的にはかなりいいかげんにしたり省略して話しても、必ずしも「わかりにくい」ということにはならない。さらに、相手がいない場合とか一方的に話すときでも、たとえばラジオやテレビで考えてみると、語り方の抑揚とか言葉の区切り、息つき、高低アクセント、イントネーションその他の手段によって、そのままわかりやすいかたちで耳にはいるようになっている。もし完全に「話すように書く」ことを実行したらどうなるか。実例を見よう。

おはようございますあれるすかなおはようございますとおもるすらしいなはいどなたですか
あどおもおはようございますしつれえしますじつわはあじつわわたしこおゆうものなんです
が

これは保険外交員のような立場の人がセールスに訪問したときの対話のはじまりである。ちゃんとした「共通語」で話してもこのていどだ。実際に話しているときは、こんなわかりにくいことはない。書いてもわかりやすくするためには、さまざまな「技術」を使うことになる。すなわち――

「おはようございます」

（あれ、留守かな？）

「おはようございます」

（どうも留守らしいな）

「はい、どなたですか」

「あ、どうも。おはようございます。失礼します。実は……」

「はあ？」

「実は私こういうものなんです……」

これならわかりやすいだろう。ここで使われた技術は次の九種類である。

①発音通りに書かれているのを、現代口語文の約束に従うカナづかいに改めた。

②直接話法の部分はカギカッコの中に入れた。

③ 独白の部分はマルカッコ（バーレン）の中に入れた。

④ 句点（マル）で文を切った。

⑤ 段落（改行）を使って、話者の交替を明らかにした。

⑥ 漢字を使って、わかち書きの効果を出した。

⑦ リーダー（……）を二カ所で使って、言葉が中途半端であることを示した。

⑧ 疑問符を使って、それが疑問の気持ちを現す文であることを示した。

⑨ 読点（テン）で文をさらに区切った。

なんでもないように見えながら九種類もの「技術」が使いわけられているからこそ、これはわかりやすい形に変化したのだ。ついでに言えば、この中で最もむずかしい技術は最後の「読点」^{（とちん）}であるが、これについては一章をもうけて詳述しよう。もうひとつ別の例を見ていただきたい。

どこにもかあちゃんひとりしかいじましたおったおいまだれもおどごあどあいねごっだ
（そたにもなにへでよべえとあへってありつてもいいごっだあははは『朝日新聞』一九七五年
三月二四日朝刊文化面「新風土記」第三九七回から）

これは岩手県二戸郡一戸町面岸の老婆が語る言葉をそのまま書いたものだ。実は新聞記事には